

本誌独占
スクープ!!

Scoop.6wheel

軽ベースの 概念を超えた 居住空間!

ダイネットとキッチン、限られたスペースですし詰めに…。軽トラベースのキャンコンならではの、そんなきゅうんなイメージを、6輪化した新型テントむしは見事に払拭した。ダイネットとキッチンのスペースを完全に分離したことで、「二」字型ソファにもシンクまわりにも十分なゆとりができたほか、エントランスドア対面側のソファを写真のように運転席側に展開すれば、「T-Po Sタイプ」で好評だった、「食事の後にゴロンと昼寝」のシングルベッドモードにアレンジ可能。



テントむしに完成!!

型破りのルックスに驚愕!



衝撃のロングストレッチボディ!

駆動輪後部に2輪を追加した分、国産コンパクトカーに近い全長となった「6輪テントむし(仮称)」。その分、居室も従来の「テントむし」のものではなく、側面を400mmほど延長したシェルを新規製作。内部レイアウトも一新した。追加された最後輪は、いわゆる“ぶら下げ車輪”で駆動はしないのだが、シェルの大型化がもたらす居住性向上は想像以上に大きく、もはや「軽トラベース」の枠には収まらない、自由な車中泊が楽しめる仕様に変化している。



●国産コンパクトカーに近い全長となったニューモデル。「テントむし」ならではのキュートな外観はそのままだが、存在感は大幅にアップした



●6輪化に伴い、側面を400mmほど延長したシェルを新規製作。サイドウィンドウも大型化し、居室内の採光性と開放感が高まった

軽キャンパーのルムジン! 6wheel

キュートなルックスでおなじみの「テントむし」に、驚愕の“突然変異種”が誕生した。このほど完成した「6輪テントむし(仮称)」は、6輪化で大胆な変身を遂げた新発想のニューモデル。見た目のインパクトはもちろん、2輪分のシェルスペース拡大によって居室の快適性を大幅に向上させている。

TEXT:堀 辰也

こんなシステムも!

●前述のように、追加された最後輪は駆動しない。そこでバック時には、ボタン操作1つで左右の“ぶら下げ車輪”のみリフトアップさせ、転がり抵抗を軽減する新システムを採用した



●内部レイアウトを一新し、エントランスドア周辺をやや広めに作れるようになったことで、ドア内側には網戸を標準装備できるようになった

●第1号車は、「テントむし」標準仕様と同じ窓付きリヤゲートを装着したが、従来モデルと同様、超大型リヤゲートもオーダーできる



●ポップアップルーフ部の2段ベッド。展開サイズは1920mm×1100mmで、くっつけて広くはないが大人2人が就寝できる広さと強度を持つ



●18ℓの冷蔵庫を収納する。キッチン背面の家具。冷蔵庫下の空間には、サブバッテリー走行充電システムなどを収納できる



●居室スペースに余裕ができた分エントランスドア側の床面をやや広めに取って、乗降時の靴の脱ぎ履きかきゆう屈にならないよう配慮した



●ベース車となるキャリートラックの純正シートは背面固定式なので、運転席・助手席ともリクライニングできる。よう、オリジナルシートを装着

もはや「軽トラ」ではないゆとりの居室スペース

6輪化によって外観も居室も劇的に変化した「6輪テントむし(仮称)」。製作したパンショップミカミは、以前からシェル拡大のための案を検討していたそう。そんななか、テントむし販売代理店であり、6輪改造軽トラックの登録実績を持っているショップから技術コラボを打診されたことで、テントむし6輪化が一気に実現したわけだ。

このほど完成したニューモデルは、駆動輪後部に“ぶら下げ車輪”を追加することで、架装の土台部分を延長。これに伴い、標準テントむしより400mmほど長いシェルを新規製作し、居室レイアウトも一新した。新しい居室の最大の特徴は、側面の延長分を丸ごと、キッチンおよび家具(冷蔵庫収納)用スペースに充てている点。

現在、テントむしの主力モデルとなっている「T-Po」の場合、最大限のマットスペースを確保するため、キッチンはオプション扱いとなっている。同モデルに、冷蔵庫と電子レンジ用2段ラックなどをセットにした「アンバーサリパツケージ」を装着した場合は、リヤゲート側のマット横幅が300mm近く狭まるため、大人2人での就寝は窮屈だった。6輪化し、延長スペースにキャレリ類を配置したことで、大人4人2段ベッド含むが就寝できて、車内で調理や洗い物なども行なえ、マット下の収納スペースも十分な、小型下ラックベースのキャンコンに匹敵する居住性を実現した。